
世界崩壊とは程遠い君と僕の恋慕事情。

九木れかにふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界崩壊とは程遠い君と僕の恋慕事情。

【Nコード】

N3302L

【作者名】

九木れかにふ

【あらすじ】

嘘に嘘を塗り重ねれば、それはいつの間にか本当に。

なるわけはなくて。重なって重なって厚くなった嘘に翻弄されながらも、僕は恋に愛に、青春に生きる。

なんて、これこそ、全部に嘘だけど。

壊れ過ぎて壊れ過ぎた、僕たちの恋の話。

じょ《序》・《章》しょう《紹》・《介》かい（前書き）

拙作、世界崩壊に伴う僕と彼女たちの崩れた日々の外伝です。そつちを見ていなくても楽しんで頂ける内容を目指しておりますが、作品の性質上あちらも読んでいただいた方がより世界観を楽しんで頂けるものかと思います。

それでわ、一ミクロンでも楽しんでいただければ幸いです。

じょ《序》・《章》しょう《紹》・《介》かい

初めに僕と言う人間を語るにあたつて、以下数行にわたつて虚言妄想の絵空事が多くの割合を占めることに相成ることと思うので、ここに注釈を先んじて入れておくことにする。

この僕、井岡 いおか 三九郎 さんくろうは公明にして盛大、一視同仁の聖人である上に隠忍自重を旨としていることで有名である。人と話せばその溫柔敦厚な物腰にて万人に好かれ、まさに外柔内剛、氣宇壮大の心をもつて驕らない。決して大言虚言妄言を吐かず、謙虚に、但し埋もれずの好位置を保っている。学問においてもその威光は及ばざることを知らず——

飽きた、止めよう。多くの割合どころか全部において嘘八百である。では僕の本性或如何に、と問われれば若干返答に躊躇うが、ここは極めて簡潔に、至極悠然と語ろう。

早い話が、以上の全文をまるまる反対の意味に置き換えたものと言つておよそ当たりだろう。大言虚言妄言は、吐かないどころか最大の武器である。我が弁舌に敵うものはない。人はこれを戯言 たわごと もしくは屁理屈と呼ぶ。

閑話はここらで休憩しよう。話が進まないどころか始まらない。勘違いをしないで欲しいが、いやここまで何一つ生産的な話をしていないのだから勘違いをするなど言う方が無理な話だが、だがしかし、読者諸君の持っているであろう大きな間違いを一つ、正しておこう。この物語は幾つかの恋と愛の物語であり、僕の下らない与太話などではまずあり得ない。

そう、これは、井岡 いおか 三九郎 さんくろうと赤坂 あかさか 紅花 べにかの、そしてその他、千秋中学研究部面々の、純粹に壊れた、恋慕事情である。

さて、それらしく締めたところにこれ以上なく蛇足であるところは百も二百も、それどころか千も承知のことなのだが、一つ、諸彦に對して明確にしておかなければならない事が残っている。

僕は。井岡 三九郎という人間は。卑小過ぎるまでに卑小な、それ故残酷なまでに残酷な、救おうにも救いようのない、史上劣悪超絶無二の。

ただの、うそつきだ。

じょ《序》・《章》しょう《紹》・《介》かい（後書き）

そんなわけで戯言の始まりです。末永くお付き合いくださいませ。

よろしければ感想評価等よろしくお願いします。

はにかみラジカリズム。(前書き)

七か月またぎの更新です。大概の御想像通り、『気が向いたから』です。連載作品としてそれは許されるのだろうかと考えないでも無いですが、本編を定期更新（とはいえ大分ペース落ちましたが）しているので許容ということにしていただけばと。

『気が向いた』分、内容的には本編より濃いかもれません。どちらが面白いかなんて問われれば、それはもう言葉を濁すしかありませんけども。面白くない、なんて言いたくないですしねっ↑

はにかみラジカリズム。

＊

僕が悪いのではない。軽いピッキングにすら対応出来ない、第一理科実験室が悪いのだ。だから、僕はこの状況——豆腐の如くぐちゃぐちゃに潰れた流し台の始末について、一切の責めを負うつもりが無いことを、ここに明記しておこう。

徹頭徹尾、始終全部、詭弁である。戯言たわごととも言えた。

では、現状を整理しよう。

学年が上がってから丁度二週間経ったこの日、我らが千秋中学は全校的に部活動仮入部の日だった。

この学校の部活動は極めて迷惑千万億兆京垓以下略なことに原則として全員強制参加で、なので現在僕は、基本的に冬場しか活動の無い天文部に所属している。まあ、この二年間、冬場だって一度として活動場所に行ったことはないけれど。幽霊部員に罰則は無いのだから、中途半端な校則もあったものである。拘束ともかかってる。我ながら寒い奴だった。

関係も意味も、ついでに理由も無い無駄話に興じるのは史上空前永劫不落のうそつき（この語り文句だって無駄以外の何でもない）であるところの僕が唯一標準装備している技なのだが、うん、少しばかり空気を読んで、話を先に進めよう。

果たして、第一理科実験室には一つの近未来的デザインをとった銃が存在していた。厳密に言えば、それは理科実験室の、壊れた顕微鏡の墓とまで呼ばれている普段まるで使われることの無い棚の奥にしまわれていた、なにかやたらと重量のある段ボール箱の中から出てきたものだった。青色を基調としたシンプルなデザインで、側面には『K・H』と、彫刻刀か何かで掘りこまれている。製作者の名前だろうか、と、まだ冷静さを保っていられる僕の思考の一部が判

断した。逆側の側面には『S-01』と、こちらは『K・H』とは打って変わって綺麗な活字で掘られてあって、おそらくこの機械：否、兵器と断じてしまおう、この兵器の型番だと考えられる。Sがなんの略なのかは知らないけれど、この結果を見る限り、スレイヤーとか、破壊的な意味合いであろうことは容易に想像出来た。なぜなら。戯れに、理科室の窓側に並ぶ実験器具を洗浄するための流し台に向けてその『S-01』のトリガーを引いた瞬間、驚くほど抵抗も無く淡い光が飛び出て、現在僕の目の前に展開する状況そのままに、まるで豆腐を潰しましたと言わんばかりに、流し台を溶解させてしまっているからである。

以上、整理終わり。

もう一度言おう、僕は悪くない。悪くは無いのだけれど、些かこの状況は僕にとって不利なのではないだろうか。

犯行現場の崩れた流し台、容疑者は一名、凶器を持った学生一人。誰が見ても僕が犯人だと邪推するに違いない。ここで問題なのは、それが邪推で無く事実だと言うことか。

考える。犯人がここで取るべき行動は如何に。簡単な話だった、証拠隠滅と逃走だ。

僕は早々に銃を鞆に忍び込ませ、誰かが嗅ぎつける前に理科室を後にしようとした。しようとした、と表現した時点で、それが失敗だったことは容易に想像できよう。

「……」

「……」

バッティング。と言っても、勿論バットを手に飛んでくる球を打ち返す行為ではない。この場合は、紛れも無く、『遭遇』という意味合いでこの単語は使われる。

僕の目の前に立ちつくすのは、一人の女生徒だった。十数歩分くらいある彼我の距離からでも目視で分かる、可愛らしい顔立ち。思わず手を伸ばしたくなるようなセミロングの髪は栗色で、背が低い事も相俟ってか、若しくは彼女自体から発せられる雰囲気からか、小

動物のようなイメージを彷彿させる。

見たことの無い女の子だった。上履きの色から同学年の生徒であることは把握できるが、同じクラスにはまずいなかったと断言できるし、それに今まで二年間この学校で生活してきて、この子の顔に対する見覚えが、僕には無かった。これだけ可愛い子ならば一度見ればそうそう忘れられないだろうから、おそらく転校生か何かだろうと推測する。であれば、同じクラスで無いのが残念だ。じゃ無くて。話があらぬ方向に逸れるのは自覚している僕の悪い癖の一つだ。無くて七癖、僕ほどの人間にだって短所は存在する。この虚言癖とか特に。

「ええと、……ううむ」

口を開いてみたは良いものの続ける言葉が見当らなかった。何を言うべきだろうか。「三組の井岡です。よろしく？」疑問符込みで自己紹介してみた。初対面には自己紹介、これ社会の常識。

唐突な僕の言葉に、少女はビクリと肩を震わせると、恐る恐ると言った体で僕の顔に視線を寄越し、また小さく震えて直ぐに逸らすとか細い声で言を紡いだ。

「……赤坂です。あの、今日、転校してきました」

赤坂さんって言うのか。僕はうなずいて、しかし直ぐに巨大な違和感に気付く。何て言った？『今日』、転校してきた？

先も言った通り、本日は全校的に部活動仮入部の日で、本来ならどの部活動も新入部員獲得の為に活動をしているはずで、まあ僕は絶対賛サボっていて、新学期開始二週間後で。始業式から二週間後なのだ、だから今日は。春の季節に転校生が居るのには何の不思議も無いけれど、始業式と同時にしかも、二週間も経ってからの時期に転校してくると言うのは、かなり普通じゃない事態に思えた。僕が疑問に満ちた表情をしているのに気がついたのか、赤坂さんは少しばつの悪そうな顔をして、申し訳なさそうに一步退いた。家の都合とかだろうか。それならば僕から何かしら聞くことも何もないのだけれど、そうあからさまに退かれると、一男子中学生としてはシ

ヨックを受けるのを禁じ得ない。

「す、すいません、えっと、……」

黙ってしまわれた。前髪で目元を覆うように俯いてるのを見る限り、ううん、もしかしたら照れ屋なのかもしれない。行き過ぎな気もするけれど、ますます可愛いじゃないか、この子。

「そう言えば、赤坂さんはどうしてこんなところに？」

「へっ、あ、その、部活動見学に……」

「ここは何もやってないはずなんだけど」

「え？　でも、学校のホームページには研究部って……」

研究部？　聞きなれない単語に、僕は一応脳内に検索をかけてみた。とんと見当もつかない。ホームページの更新が、数年前で滞っている可能性を考えてみた。うん、妥当だろう。あ、と思う。なるほど、『S-01』はその研究部の遺産なのかも知れない。……中学生が作成するものにしては、ちよっと能力がぶっ飛んでないかな？

「無いんですか、研究部」

「無いね、研究部」

「そうですか……」

すぐく残念そうに呟くと、赤坂さんはそのまま踵を返して理科室から出て行こうとした。溶けた流し台に何も突っ込まないあたり、寛容なのか、鈍感なのか、若しくはこのくらいの現象は当然の、とんでもない環境で育ってきたのか。色々と憶測を飛ばしてみるが、教師に報告の線も無しでは無いため、僕としてはこの子をこのまま帰すわけにはいかない。

「ちよっとちよっと、赤坂さん」

「っ」

ちよっと呼びとめただけなのに、赤坂さんの肩が思いっきり跳ねた。かなり傷ついた。しかしなんだろう、本当に彼女の反応はどこか違和感を覚えるものが多い気がする。

「なん、でしょう」

「うん。……ええと」

今度は僕がどもる番だった。止まってくれた方がいいが次ぐ言葉が見当らない。しばらく考えて、しかし僕が『そう』言ってしまったのは、きつと色々な意味で、仕方がない事だったのかもしれない。

「じゃあさ、研究部、作らない？」

ラジカリズム。そんな単語が、脳裏をよぎった。急進主義とか、そんな意味合いだった風に記憶している。結果として、僕のこの判断はこの先の残り少ない中学校生活を圧倒的に変革させる、ある意味ではとても成功したものだっただけけれど、この時の僕の思考には、普段絶対使わないような、そんな単語しか浮かんではいなかった。とってつけたような理由を考えてみる。段ボールの中身、旧研究部の遺産を、もう少しいじってみたいって言うのが一つ。適当に手に取った『S-01』ですらあの脅威だ。他の物にも興味を移すのは、僕が僕である上で重要な要素だった。興味本位、上等じゃないか。後は、この可愛らしい少女と、赤坂さんともう少し話してみたいというのが一つ。彼女から感じる違和を、俗っぽいけれど、僕は暴いてみたかった。……興味本位、上等じゃないか。なんて、彼女の返事も聞かずに夢想に浸っていたわけだが。

「本当ですか！？ 是非、よろしく願いますっ」

言いだしたこちらの度肝を抜かれるような勢いに、僕は文字通り言葉を失った。同時に募る、不信任感。

なんなんだ、この子。

井岡 三九郎、正式に受験生と呼ばれる立場になって二週間。僕の人生は、ここで完璧に狂った。こればかりは、誇張でもなんんでもないと宣言しておく。

はにかみラジカリズム。(後書き)

そんなわけで、次回は七カ月もは開かないよう留意しますです。あ
りがとうございました。

奔走アセンブル。

＊

確認すると、赤坂さんは驚くべきことに僕と同じクラスだそうだった。本当は今朝から転校してくるはずだったのが、手違いで午後、部活動仮入部が始まってからの登校になったらしい。

「手違いって？ 情報の伝達不足とか？」

「あ、えっと、十二時に起きたんです」

「……」

今しがた聞こえた台詞がすんなり頭に入ってこなくて、少し考える。ふむ、つまりこれは、

「寝坊って言うんじゃない？」

「……」

目を逸らされた。いやいや、幾ら目をそむけたところで真実は変わったりしないのだ。立てば法螺吹き座れば詐欺師、歩く姿は大嘘つきみたいな僕を持ってしてもそればかりはどうしようもないのである。精々嘘の鎧で本体を隠してみるくらい。ま、それで大概は誤魔化しきれてしまうのだけど。

寝坊の事実は消えない。ていうか、やっぱりこの子、なんかずれてるな。転校初日に寝坊なんて聞いたことない。

「わ、私、そんなメルヘンな人間じゃないです……」

「いや、自分でその単語を持ち出してくるあたりが既に相当メルヘンチックだ」

童話の中の少女でもそこまでほわっとしてないだろう。……まあいい、この話題を掘り下げたところで僕が得られるのは紅潮し続ける赤坂さんの表情だけである。充分需要はある気がしたけれど、僕は別にサディストじゃないのだ。人の嫌がることは程々に。全く見逃すのは面白くないけど。

「えっと、研究部の話だったな。作るとは言っても、僕ら三年だし、

この学校で新しく部活動を作るには最低五人以上の名義が必要なんだ。それも、四月末までにね。あと一週間くらいしかない」

「無理、でしょうか」

「どうかなあ。とりあえず二人分は『なんとでもなる』知り合いがいるけど、もう一人はちよつとアテが無いかも。赤坂さんも転校してきたばっかだし、友達なんかいないよな」

「はい、さっき登校してきたばかりなので、井岡くんが最初のお知り合いです」

「そりゃ光栄。しかしこうなると困ったね。僕は友達は少ないわけじゃないけれど、なんだかんだあいつらは今の部でそれなりに楽しんでるみたいだから……」

規則でいい加減に選んで入っても、案外楽しめたりしちゃうものらしい。まあ、一回も参加してない僕にはそれも無縁な話だが。楽しむ気がそもそももない。そんなポジティブで生産性溢れる人間なら、もっとまともな人格形成に成功していたはずである。

考えても栓の無いことだ。最後の二人のことは他の二人を引き入れてから考えよう。そうなると、明日の教室で、ということになるから、今日出来ることはもう無い。

「じゃあ、そのあたりのことは明日から本格的に考えよう。運の良いことに僕たちは同じクラスだそうだし」

「そうですね。あの、ありがとうございます、私なんかにつき合っていたらいいです」

「暇つぶしだよ。入部二年にして天文部に一度も顔を出してない僕とて、暇じゃないのかと言えば全然そんなことは無いんだから。面白そうな事があれば、そっちに流れるくらいのことはする」

「……はい。それじゃあ、今日はこれで失礼します」

「ちよつと待った。同い年だしクラスメイトなんだ、むずがゆいから敬語は無しにしてくれないかなあ」

「あ、わわ、ついクセで。ごめんなさいっ。それじゃあ、えっと、また明日ねっ」

「ん。ぐっばい」

パタパタと小走りで廊下の向こうに去っていく赤坂さん。敬語がクセだったりため口きくのを恥ずかしがったり（「また明日ねっ」の語尾が僅かにひっくり返っていた）、ああ、また今もまっ平らな廊下で躓きかけたり、なんだか忙しい子だった。

可愛い子、変な子、忙しい子。たった数分の邂逅で、こうもたくさん印象を植え付けられている。それに、まだ正体の掴めないよくわからない違和感。失礼な言い方だが、僕は彼女に強く興味を持った。面白そうじゃないか。面白くなりそうじゃないか。そして、僕が面白くするのだ。

＊

翌日、である。正確には僕と赤坂さんが初邂逅を果たした翌日で、この日は全校的に何もない普通の一日だった。ならば何も特筆することは無いだろうと思われるかもしれないが、何もないと言うのはあくまで全校的に見た時の話で、言うところの、僕達三年三組には何かがある日だったのだ。勿論僕は何があるのか知っていたわけだけど。赤坂さん、転校初日（正式には二日目）だ。

朝のホームルーム時、国語科にして担任教師日下女史の紹介で、小柄な少女が教卓隣へ歩み出てくる。言わずと知れた赤坂さんである。今日もおどおどとした、警戒心丸出しの小動物チックな所作は変わらない。元より人前に立つのが苦手なのかもしれない。それが一人でも、二人でも、数十人でも。一対一であの様子ではさぞかし、とも思ったのだが、そこはどうやら、彼女の羞恥に人数は関係しないみたいで、昨日と変わらぬ口調でたどしく自己紹介をするのであった。とても「こなす」なんて動詞がつけるような手際では無い。噛み噛みである。途切れ途切れである。

それはそうと、日下女史、昨日も一昨日も、勿論その前からも何一つ転校生については語ることも無く、どころか本日今さっきも、何の前触れも無く廊下に手招きをしたものだから、クラスメイトは

騒然どころの騒ぎではなかった。大わらわである。日下女史のしたり顔を、僕は見逃さない。そう言う御人なのだ、彼女は。

「そう言うわけだ、赤坂ちゃんには……そうだな、折角年度初め、出席番号順に並んでるから、井岡の前に座してもらおう。ほら、窓際族、机一個分さがれ」

転校初日の生徒をちゃん付けにし、横暴な所作で僕たちを一人分ずつ後ろに下げる日下女史。学期初日から何故か教卓横にあった予備の机を配置して、赤坂さんは其処に誘導された。窓際族の使い方は絶対間違ってると思う。と言うか、まさかとは思うのだけど、この机、もしかして最初から赤坂さんの為に用意されてたのではなからうか。僕の推察は直後に正しかったことを知らされる。

「んじゃ、正規のクラス名簿配るから。全員今覚えてる自分の番号忘れて、正しいの覚え直すよーに。以上、一時間目は私の授業だ、予鈴までそう時間は無いから、ふらふら立ち歩いてないでさっさと準備しときな」

正規のって。配られた名簿に目を通すと、昨日まで一番だった僕の数字は、二に書きかえられていた。……学期初日から既に印刷されていたのだろう。もう二週間過ぎてる。伏線の張り方が無茶苦茶だった。

日下女史が教室を出たのを確かめてから、僕は新たに前の席の住人となった赤坂さんに声をかけた。

「おはよう」

「あ、おはようござ……」

います、まだ言うかと思ったところ、パクパクと口を開閉して声を消す赤坂さん。僕が首を傾げる一瞬前に、小声で「おはようっ」と言いなおした。敬語禁止をギリギリ想い出したらしい。相変わらず俯きがちで恥ずかしそうなのが好印象だ。可愛いなあこの子。

「井岡くんと席近くて良かった」

はにかみ笑顔で言うのである。一種凶器じみた破壊力だった。まあ、僕はそんなのにほだされたりしないけど。うむ。戯言だ。

「折角友達になったからね、僕も嬉しいよ。月並みな言葉だけど、何かあったら聞いてくれて構わないよ」

「……はい。えっと、あの、日下先生ってすごい人だね」

「その件に関してはこのクラスの誰もがそう思ってることだろうね。先に忠告しておくけど、あの人のやることに一々突っ込んでたら身がもたないよ。あと、彼女のことは日下女史と呼ぶんだ。最初のホームルームで最初に義務化したのがそれだったから」

「うん」

素直に頷く赤坂さん。まあ、半分嘘である。確かに「日下女史と呼ぶように」とは言われたが、義務化された覚えは無い。そう呼ぶのは専ら僕と、他二人くらいである。この子は将来詐欺に掛かる心配がある。騙してるのは僕だけだ。

「じゃあ、予鈴までそう時間は無い、けど、とりあえず研究部に入ってくれそうな奴に声かけてみようか」

「あ、はいっ」

カタと音を立てて席を立つ赤坂さん。僕が横座りになって椅子の背に手をかけたからであろうが、大変申し訳ないことにフェイントである。この程度の動作にフェイントをかける必要があるのか僕にも分からないが、まあ、騙されてるのを見るのは碌でも無くも楽しい。座りっぱなしの僕を見て、彼女はちょっと慌てている。手だけで座るように促した。

「えっと、井岡くん？」

「うん。当っててコイツの事だからさ」

言って、困惑の表情を浮かべる赤坂さんの視線を、親指で後ろを指して誘導した。指された奴を振り返ると、彼は無然として僕を睨んでくる。無視して、とりあえず赤坂さん呼び寄せた。結局立たせるのである。無駄な動作が多い。

「井岡、尊厳ある人間をたかだか親指如きで指し示すのは礼に反する行為だと思わないのか？ 恥を知れ」

「親指にも人間を構成する一部として大いなる役割があるだろう、

それを如きとはなんだ。じゃあ君の親指を今すぐ切り落とせよ、すっげえ不便だと思うぜ」

「俺もそう思うな。失言だった」

言いくるめられやがった。そもそも「如き」さえ付け加えなければ完全無欠に僕だけの過失だったのだが、この辺がこの男、上野の阿呆なところだ。彼とは中一からの付き合いだ。色々、知り尽している仲である。

「訂正しよう、井岡、尊厳ある人間をたかだか親指で指し示すのは礼に反する行為だと思わないのか？ 恥を知れ」

「そう訂正するんだ」

「たかだか」がある以上親指を侮辱している状況は変わらないのだが。僕の隣に立つ形になった赤坂さんはひたすら困惑している。ちなみに、転校生に興味津津であろうクラスメイト達が何とか彼女に話しかける隙を見つけようと画策しているのが分かるけれど、案の定、彼女の視線は僕で固定されている。何と言うか、朝っぱらからクラス全体を手玉にとる僕だった。何してんだか、我ながら。

話を進めよう。加減なく詐欺まがいなのは僕の紛れもない特色ではあるのだが、そればかりではつまらない。展開は物語に必須の条件である。

「単刀直入に、上野、研究部に入らないか？」

「研究部？ 聞かない名前だな」

「うん、僕と赤坂さんとで新設する予定なんだ。親友の君にも是非入って欲しくて」

「お前は本当に白々しいなあ」

呆れられてしまった。遺憾だぜ。

上野は僕と赤坂さんに一度ずつ視線を向けると、数秒目を瞑って、それからうんと頷く。

「分かった、入ろう」

単調な言葉だ。というか、あっさりだった。

「おっけ、了解。助かるよ。頭数がそろったら書類持ってくるから、

その時にまたよろしく」

「分かった。それまでに天文部は退部しておく。井岡の分の退部届も貰っておこう」

それっきり、上野は何も聞いてこなかった。転校初日の赤坂さんと知り合っている理由だとか、研究部の全容だとか、この時期に新設する理由だとか、聞かれるべきことはたくさんなのだが、どの一つも、上野は口にしない。分かっているのではなく、聞く気が無いのだろう。コイツはいつもこうなのだ。頼まれごとをしたら、表面だけ聞いて、考えて、判決を下す。その際に生じる疑問点は、依頼をこなしながら解決する。面白いスタンスである。利用させてもらった、と、僕は思わない。上野は何だかんだで頭も容量も良い奴なのだ。曲者である。僕と上手く付き合えているのもそのあたりに理由があるのだ。

話が終わって僕が前に向き直っても、赤坂さんは訳の分からないような表情で目を白黒させていた。結局この子、立つ必要も無かったんだよね。

「あ、あの、井岡くん、何が起こったんですか……？」

「敬語敬語」

「わ、ひゃ、な、何が起こったのっ？」

ううむ。可愛い。……ちよっと遊び過ぎかな。

「うん、コイツ、上野って言うんだけど、研究部に入ってくれるんだってさ」

「話は聞いてたけど……。色々説明しなくて良いのかな」

「良いんだよ、そう言う奴だから。大丈夫、直前になってやっぱ嫌だなんて言い出す奴じゃないから。僕の名にかけて保証しよう」

不安と不信の我が名だけど。僕なら絶対信用しない。この名を聞いた時点で詐欺を疑うだろう。

けれど、赤坂さんの答えは、勿論イエスだった。小さく頷いて、タイミングよく鳴った予鈴に合わせて身体を前に向ける。僕の本性を知らないからね。知ったところで、それでも彼女は僕を信用して

しまうような感じもするけれど。ううむ、読めない。

予鈴の余韻が完全に消え去ると同時に、チヨークしか持たない日下女史が教室に戻って来た。教科書の内容は一字一句変わらず脳内にあると断言した最初の授業以来、この人は本当に教科書を一切見ずに授業を進めている。

赤坂さん、日下女史、上野。僕と同等か、或いはそれ以上に読めない人間は、こうも近くにあたり前に溢れている。僕なんて所詮ただの嘘つきなのだ。ああ、もう、面白いなあ。

さて、面白い人間はまだいるのだ。もう一人のアテ、桂ちゃん。^{かつら}次は彼女にあたってみよう。

奔走アセンブル。(後書き)

七か月どころか十一か月近く空いてしまいました。誰より僕自身が吃驚してることでしょう。呆れかえられてもなんら不思議の無い月日が経過しています。

奔走アセンブル。ひたすら無意味に色々を翻弄する三九郎。とは言え、仲間は少しずつ集まって行きます。全くキャラクター像を考えても無かった日下女史が曲者になりそうです。

それでは、今度こそ、何カ月も空いたりしないよう、頑張ります。

両面パッセージ。

＊

「その、桂さんって言うのはどういう人なんですか？」

「赤坂さん、敬語敬語」

「わっ、ええと、桂さんってどんな人なのっ？」

赤坂さんと迎える二度目の放課後である。ため口には未だ慣れないらしい赤坂さんは相変わらず語尾を撥ねさせながら、懸命に言葉を紡ぐ。うむ、暫くは慣れないでいて欲しいものだ。

「桂ちゃんは、そうだなあ。彼女を一言で表すにすごく相応しい言葉があるんだけど」

「そうなんです……そうなんだっ」

「うん。人呼んで『器用貧相』」

「……ひんそう？」

「そう、貧乏じゃなくて、貧相」

一字違いがとんでもない差を生みだしているのだ。

桂ちゃん。本名、桂 梨桜^{りお}。貧相などと呼ばれてはいるが、特段痩せ過ぎやら、所謂まな板だとか言われる体型の持ち主というわけでは無く、見た目に関して言うならば、多少童顔ながら涼しい目をした、痩せ過ぎでもまな板でもないスレンダーな麗人である。性格もクールな感じで、あまり表情を大きく揺らがせることは無いが、顔は可愛いし、僕にしてみれば彼女がクールで通っていること自体面白い話で、だからちゃん付けで呼ばせてもらっている。勿論本人は迷惑がってるけれど。

「器用貧相」。彼女、桂ちゃんは、基本ものの見方がひん曲がっている僕の眼からしても異常なまでに器用な人間で、勉強からスポーツ、芸術において、ほんの僅かに経験するだけで、およそ初心者と呼べる域を超越する。何でもできるし、「器用貧乏」で言われるように「何でも出来るけどいまいち中途半端で大成しない」なんて

こともない、どれも突き詰めていけばその世界でトップに突き進んでいけるような、そんな圧倒的な器用。彼女を知った当初は、単純に「オールマイティの大天才」だと思ったほどだ。

だが、そんな彼女にもどうしようも無い弊害がそんざいする。…貧相なのだ。

二年前、中学一年生の時も、僕は上野や桂ちゃんと同じクラスだったのだが、或る朝、僕が遅刻して登校していた日にそれは判明した。

それまでも、彼女はやたらめったら遅刻の多い生徒だった。むしろ遅刻しない日の方が少ないくらいで、とは言えあの才能だったから、皆勝手に「天才は何処か変なところがあるって本当だったんだな」みたいな解釈で納得していたし、僕もその一人だったのだ。しかし、その日の道中、学校も近付いてきた辺りの石段の中腹で座っている彼女に話しかけた時から、僕の持っていた桂ちゃんに対するそれまでの印象は何処かに吹き飛んでしまった。

僕の記憶も絶対でないから、一言一句間違いないと言うことは無いけれど、その時交わした会話が、大体以下のとおりである。

「桂さん、おはよう。登校中に会うなんて珍しいな」

「そうね」

「こんなとこで何やってるの？」

「……学校って、遠いわよね」

「僕の家からは徒歩十分なんだ」

近いものである。とすると、彼女はかなり遠くから通っているのだろうか。いやそれ以前に、何故自宅から学校までの距離が今出てくるんだろうか。

「そう、私の家からは一時間くらいよ」

「うっわ遠いな。そりゃ遅刻もするかも知れないけど、なんでそんな遠くから通ってるの？ 大体学区内の一番端っここからでも三十分くらいだと思っただけ」

「君が歩いたらそうかもね」

「……え？」

「君、井岡が歩いたらそうだろうけど、私が歩いたら一時間くらいかかるのよ」

「……もっと速く歩けば良いのでは」

「疲れるじゃん」

「……………」

「自慢じゃないけれど、私は一キロ歩くのに常人の二倍かける自信があるよ。スポーツは得意だし割と好きだし、今のところ体育でも短距離走しかやってないから問題無いけれど、持久走は走り切れないと思うし」

「……………つまり。」

「体力が無いの」

と、いうことで。実際のところ、授業で男子は千五百メートル、女子が千メートルを測った時、桂ちゃんは初めからスタート地点につくこともなく見学していた。さらに驚いたことに、彼女の体力の無さは医者診断書付きらしい。歩くなら普通で速度で大体一キロ、全力で走るなら百メートル行けるかどうかの持久力で、その後暫く休憩をとらないと、ほとんど全身に力が入らなくなってしまうそうだ。診断書とは言ったものの特別厄介な病気を抱えているとかでは全然無く、肺も心臓も健康そのもので、ただひたすら体力だけが、一般水準を大きく下回るのだ。

「天才は何処か変なところがある」。遅刻が多い――時間ルールズであることが、「変なところ」に嵌ると思いきんでいたのは大外れ、体力が原因であろうとは、まさか誰も気づかないだろう。

と言うことで、それから二年過ごしてきて、彼女の体力が著しく無いことに気づいているのは僕だけだ。持久走などを見学する彼女を見て友人達は「何か病気を持っている」と判断したらしく、しかし彼女たちはそれを本人に直接聞くのはデリカシーに欠けると考えることが出来る人間だったようで、桂ちゃんも自分から何を説明するでもなく、結果、今まで誰ひとり、このとんでもない事

実に気づく人はいなかったのである。皆良い奴なのが変な風に作用していた。

それをあっさり、赤坂さんに話しちゃ僕なんだけど。隠すことでもないし。桂ちゃんも隠す様子はなかったわけだし。いいよね。ちなみにお気づきかと思うけど、この事実を知っていたのが僕だけと言うことで、あたかも通り名であるかのように語っていた『器用貧相』の肩書きだが、使っているのはまあ、普通に考えて僕だけである。人に話すのもこれが初めて。

「貧相……ですか。難儀な人ですね」

「敬語敬語」

「あ、う、ううう……」

縮こまる赤坂さん。回を重ねるごとになんだか楽しくなってきた。クセだと言っていたのは本当らしい。面白いなあ。

「ところで井岡くん、これって何処に向かっているの??」

「職員室の方。外の渡り廊下から職員室のベランダに侵入できるんだけど、うちの職員室の窓際って段ボールだらけだからばれないんだよね。で、ベランダの奥から簡単に登れる木があって、そのてっぺんで桂ちゃんは基本サボってる」

「——サボって」

「そ、サボってる。放課後も暫く其処で呆けてるから、まだいると思うよ」

授業を受けても受けなくても、テスト前に教科書を一通りなぞれば高得点が取れる桂ちゃんなので、気の向くままにサボるのだ。今日は恐ろしいことに朝から、鞆だけ置いて彼女の姿は無かった。日下女史は多分気付いてて出席扱いにしてると思う。その辺は何故か寛容な人なのだ。学校内にいるんだから遅刻でも欠席でもないだろう、と。

「あ、もしかして桂さんって、井岡くんの隣の席の人なの?? ずっと空いてた」

「ご明察。今朝までは斜め後ろの人だったんだけどね、今日からは

晴れてお隣さんだ。……上野に恨まれてそうだな」

「？ 上野くんには？」

「そ。上野の奴、桂ちゃんに恋をしてるんだよ。奇怪だろう」

「そうなんだ。でも桂さんって可愛いんだよねっ、じゃあ、上野くんも別におかしくは無いんじゃない？」

「外見が良くてもあそこまでイレギュラーだと、普通恋愛対象なんて俗な見方にはならないと思うんだけどね」

「あ、確かにそれはあるかも」

「だろ。……さ、こっから入るんだ。一応職員室ではあるから、教師にばれないように黙って通るよ」

「う、うんっ」

そんなわけで。

歩く歩く。このベランダの存在に気づいている人間は極めて少ない。その上気付いたとして、大概の人間はその先の木になんか気を留めやしないのだから、桂ちゃん御用達の席に誰かが立ち寄ることはまずないだろう。ちよつとした秘密基地気分である。

ちなみに上野は知ってる。まあ、知ってるからと言ってそうそう近づくと言うことでも無いわけで。桂ちゃんと対面しても上野は顔色一つ変えず普通に会話するが、元々があの性格だし、顔に出して無いだけで実はそれなりに緊張しているようなので自分から彼女に頻繁に近づこうとは思わないのだろう。

シャイなのだ。

似合わねー。

ベランダは直ぐに行き止りになった。良い具合に木々が隠してくれるため、橋のようになっていいる渡り廊下の方からも校舎側からも僕らの立っている位置は見えない。

手頃な枝に手をかけて、さっと身体を引きあげた。木登りタイムである。

結構容赦なくさくさく進んだつもりだったが、存外、赤坂さんは普通についてきていた。スカートで木登りするのにも大して抵抗を

覚えていないように見える。下に人がいないから警戒していないだけだろうが。……ポテンシャルは高いんだろうか。イメージ的には
 ころそんな感じだったんだけどな。

「この上だよ。太い枝が密集してるからこの位置からしか上がれないけど、そのおかげで上ではほとんど普通に歩けるようになってるんだ。初めて桂ちゃんを見つけた時には、彼女は横になって寝入ってたくらいだからね」

桂ちゃんの肝っ玉は尋常の比じゃないから、一概に「寝転がる余裕がある」とは言い切れないけど。ちなみに僕は寝た事がある。夏場だったが故、草が良い感じに布団の役割をしてくれて気持ちよく眠れた。気付いたら陽が沈んでいたってのは、なんというか、馬鹿である。

「そんじゃ、上がろうか」

「は、はいっ」

「敬語敬語」

「えっ、あ、う、うんっ」

……お約束をこなしまして。

「わぁ……」

まだ若い葉が茂る木の上に立って、赤坂さんは感嘆ともため息ともつかないような声を漏らした。無理もない。同じくらいの高さの木々が集まった上から見る向こうの景色は、ちよっと日常からはかけ離れた、荘厳とも言える風景なのだ。この学校自体小高い丘の頂きにあるため、見渡す街並みはミニチュアのように嘯いて見える。そもそも家も町も人間の作りものなのだから、作り物めいているのは当然なんだけど。

「さ、赤坂さん。僕も初めて此処に来た時には似たような反応をしたものだけど、取り敢えず今は目的を果たそうぜ」

「あ、うん、ごめんなさい。え、と……あの人、かな？」

「そ。やぁ桂ちゃん、昨日ぶりだね」

登って来た僕たちに気づいてか、それまで寝そべっていたらしい

桂ちゃんは、上体を起こして僕らを見遣っていた。寝ぼけ眼ながら、僕を認識すると若干迷惑そうな顔をする。遺憾な反応だ。

「当然の反応だと思うけど。井岡が来て私が得をしたことは一度も無いわ」

「そりゃあそうだって몬드だよ、桂ちゃん。僕が君に得をさせに行ったことは一度も無いからね」

「よくも安眠妨害してくれたな」

「今の前置きからまさかのタイムリーな恨み言！」

「珍しく朝早くついたから、ちよつとここで風にあたろうと思ったのよ。でも、登り切ったあたりでつかれたの」

「聞いてない説明をどうもありがとう」

結局疲れて眠ってただけじゃん。上野の時同様、赤坂さんは僕らのテンションについていけず目を白黒させている。

気持ちわかる。入りにくいよね、このテンション。

まあ、話を進めよう。

「ところで桂ちゃん、今日は話があってわざわざ探したんだよ」

「居場所の想定はついてたでしょ」

「そういうのは気付いた上でスルーするもんだろうが」

僕も僕で一々応対するから話が進まないんだよ。

「……そっちの、見たことない子だけど、その子関係？　もしかして井岡の彼女だったのなら、悪いこと言わないから君、さらっと別れた方が身のためだよ」

「赤坂さんは転校生だよ、今朝からクラスの一員だ。そんでもって僕が彼女だなんて作るわけないだろう」

「作れないんだろ」

「失礼な奴だな」

「井岡にだけは言われたくない」

全くだった。って、あれ、話進んでないじゃないか。堂々巡りである。

「んで、だから桂ちゃん、話があって来たんだよ」

「……井岡の話に傾ける耳は遙か昔に失くしたけど、どうやら君だけの用じゃないみたいだし、話すならさっさと話して。実は君たちの声が聞こえて目を覚ましたばかりで、空が赤らんでる現時刻に結構焦ってるの」

「すぐく馬鹿な言葉が聞こえた気がするけど。じゃあ単刀直入に。桂ちゃん、天文部をやめて研究部の創設メンバーになってくれないか」

「やだ」

「はええっ！」

即断で拒否された。もう話は終わったとばかりに、桂ちゃんは立ちあがって服に着いた葉を払い落す。いやいや、もうちょっと詳しい話を聞いてからでも判断は遅くないんじゃないかなあ。

「聞く意味無いもの。私は天文部員なの。知ってるでしょ」

「知ってるけども。でも君だって僕や上野と同様、幽霊部員だったじゃないか。ここ二年間で参加した回数言ってみろよ」

「零回」

ほら見ろ。答えつつもなお僕らが上がって来た唯一の通り道に向かって歩く桂ちゃん。もつとすんなり行くもんだと思ってたのに。参ったなあ。

「あのっ」

と、発言したのはさっきまでだんまりだった赤坂さんである。桂ちゃんの正面に立って、しっかり目を合わせて口を開く。僕が研究部開設を提案した時と同じ、やたらと力強い目で。

「研究部、どうしても作りたいんですっ。でもそのためには五人集めなきゃいけないって……。籍入れるだけで良いので、なんとか入ってくれませんか？」

「……やだ」

「何にそんなにこだわってるんだよ、桂ちゃん」

口出ししてしまった。いやいやだって、桂ちゃんをなまじ知ってる身としてはこの喰い下がり方は異常なのだ。目に見えて大きな損

が無い限り、桂ちゃんが其処まで拒否する場面を見たことがない。
一昨年の文化祭でクラスの出し物が演劇になった時も、人手が足りなくてさんざん駆り出されつつ文句の一つこぼさなかった。そつなくこなすから、かなり注文が舞い込んでいたのに。

「何って、だって天文部は……」

「……あ」

「それ以上言わないで」

台詞から感づいた僕を桂ちゃんは先んじて制する。しかし、成る程、僕とした事が他人の弱みを失念していたなんて。

天文部と言えば、僕や上野が所属している部である。勿論僕も上野も完全無欠に幽霊部員なのだが、一応部員名簿には載っているのだ。

上野。

上野は桂ちゃんに恋をしている。僕が桂ちゃんと話すようになってしばらく、其処に彼が加わるようになってから直ぐ、上野は僕に恋心の発生を告げた。
で。

それとほぼ同時期、ちょっと様子が変わっていた桂ちゃんに何となく思いたってカマをかけてみると、これがまた面白いぐらいに上手く嵌ってくれたのだ。

つまり。

彼らは両想いなのだ。同じ部に籍だけでも置いておきたいという気持ちとは分からんでもない。僕だって気に入った人間と一緒にいたいとは思うわけだし。僕の気に入り方と恋心は、きっと一緒にしちゃいけないんだろうけど。まあ知ったこっちゃない。

して、となれば話はとても簡単である。

「桂ちゃん、君の標的は天文部を退部したんだ」

「……標的？」

僕の台詞に赤坂さんが首を捻る。一応彼女に分からないように配慮したつもりなんだけど、思惑通り、桂ちゃんは今の一言で理解し

てくれたらしい。おそらく、上野が研究部の創立メンバーに入ったことまで。それはともかく赤坂さんに説明を続ける。

「そう、標的。桂ちゃんね、とある使命があつて天文部にひそんでいた裏組織の幹部を暗殺しなきゃいけないんだ。サボってるだけって言ったけど、実はよくここに通っているのは見張りの為だったんだよ。今日はどうやら、寝ちゃったようだけど」

その上、あくまで天文部室を見張るだけだから標的が彼女に気づいて退部したことを知れなかったんだ、と。

嘘八百もここまでいけば清々しいもんである。言ってるのは僕だが。というか、上野が桂ちゃんに想いを寄せていることを話したんだから、その逆も知られて今更なんの問題も生じなかったのだが、まあその辺は、赤坂さんがもしそれを彼女に伝えてしまったら片思いのし合いである面白い状況が終わってしまうことを危惧しての、つまり僕の道楽である。

「そ、そうなんだ……標的。でも、人を殺すのはいけないと思うよっ」

……………え。

「ねえ、君、赤坂さんだっけ、それ信じるの？」

「あ、え、まさかあれですかっ。不慮にでも知られてしまったからには闇に屠らなければならぬとかっ」

「……そんなことは無いけど」

「なんだ、良かったあ」

心底安堵した模様の赤坂さん。ええー。

僕が些か呆然としていると、桂ちゃんが僕を横目で睨みつけてくる。

「なんだよ」

「なんだよじゃない、井岡、この子を君とあんまり関わらせておくのは危ないから、……研究部、入れて」

「……まいどー」

まあまあ、半分くらいは予定通りである。赤坂さん、この子はち

よつとやそつとじゃ測り知れないくらいの素質を持っているみたいだった。

「赤坂さん、研究部に入れさせてもらうわ。よろしく」

「ほんとですか！？　ありがとうございますっ」

「敬語敬語」

「うあ、え、でも、敬語禁止は井岡くんと約束で……っ」

「駄目よ赤坂さん。そいつと約束なんて危険なだけだから。どうしてもって言うのなら、その約束、私とも並行して」

「え、えっ」

「……新しい仲間とは出来ない？」

「ええっ、いえっ、全然そんなことないですっ!!」

「早速出来てないな」

「あわ、すいませ———ごめんねっ」

と、まあ、そう言うことで。

四人目の仲間獲得だ。首尾は上々。

さて、残り一人と顧問、どうしたものかな。

両面パッセージ。(後書き)

サブタイトルは上野と桂ちゃんの恋慕から。両側通行的な意味を込めて。です。

要するにあまり深い意味はありません。

着々とメンバーが増えていきますが、未だ揃ってないです。あと幾話ほどか。

それでは、よろしければ次回もよろしく願います。

相似オポジット。

＊

上野と桂ちゃんを仲間に引き入れて、一日が終わった。

ここまでの首尾は上々と言って間違いはないが、ただ一つ困った事に、研究部発足に加担してくれそうな人材は、僕の知り合いリストにはもういなかった。最低でも後一人と、ついでに顧問の問題が残っている。どうしたものかな。

それはそれとして、早朝六時。目ざまし時計より二分早起きして、購入来一度もその役目を果たしたことの無いアラムの設定をオフにする。セツトしておく意味も無い気がするけど。無意味っていうのも悪くない。

さらっと着替えたら、靴を履いて日課のランニングだ。

運動部でも無ければ鍛錬を趣味にするでもない僕だが、どうしてか、それも何時からか、誇張でなく台風がこようとも、毎朝三十分、自宅のマンションの前を流れる川沿いを、通学路とは逆方向に走っている。理由は無いし大した意味も無いが、まあ、体育の持久走なんかでは重宝するし、割と悪くない運動神経を如何なく発揮するには根幹となる体力が不可欠だから、我がことながら首を捻りつつも、日課であるからには日課として、僕は毎日走る。

今朝は晴れだった。川沿いの道。川の逆方向には桜並木である。秋になれば川を挟んで反対側を走ることになっている。あっち側は紅葉が並木になっているのだ。同じ走るなら季節感を感じられた方が良さだろう。

とか、情緒あふれる生き方を選んでみたりしてくせにこの捻た性格なのは何故か。

まあ多分、僕くらいになると、情緒っぽいのがむしろ捻くれてみえるのだ。

ぐにゃぐにゃなので。

ともあれ、今の季節は桜並木を。もう、ほとんど散ってはいるけど。

ひた走る。
と。

往路半分……七分くらいが過ぎた頃、今はまだ緑色の葉をつける紅葉並木の側から、いつもの顔が走ってくるのが見えた。

同じ年くらいの女の子だ。

普段は下ろしたままのめっちゃ長い髪を、ポニーテールに纏めている。それでも長い。毛先が腰の位置よりも全然下に来ている。膝裏……くらいだろうか。

長い長い。

川を挟んだ位置関係で、僕と彼女の視線は、一瞬だけ交わった。そのまま、お互い速度を緩めずに目の前の道に行く。

おそらく、僕が走りだしたのと同じく変わらない時期から、彼女の姿を川の向こうに見るようになった。

台風であろうとも、彼女が走っていない日は今まで一度も無い。そして必ず、この辺りの地点で川越しにすれ違うのだ。

一瞬だけ視線をかわして。不思議な顔見知り関係だった。

もう数年の付き合いになるのに、彼女と僕はランニング中、一度たりとも会話を交わしたことは無い。秋になれば僕は向こう側に渡るわけだから、そうなる川を挟まずに顔を合わせることもあるのが道理だが、しかし、世の中は上手く出来てるもので。

秋が深まってくると、あの女の子は必ず此方側——桜並木を沿って走るのだ。

僕が言うのもなんだが、季節感の無い方をわざわざ選択する辺り、確実に捻くれ者だろう。僕ほど、とは言わないが。

所詮「にわか」か、とか、勝手に馬鹿にしたりもする僕である。失礼な上に余計なお世話も良い所である。

折り返し。

ペースを変えず、復路。同じ道だけど、方向が変わるだけで大分

景色が違って見える。そんな細かい情緒は実の所持ち合わせていないけれど、そのあたりは感覚でカバーすると言うことで、やっぱり黙々と、僕は走った。

もう七分、経って。さっきとほとんど変わらない地点で、また、彼女と擦れ違い。

さらに七分が過ぎる頃に、僕はマンションのエントランスに入るのがだった。日課終了。温暖な気候の中、丁度いい感じに汗が滲んできくる。

シャワーで汗を流しながら、ふと思いついた。

小学校こそ違ったが、この近所に住んでいるのは間違いないわけで、かの女の子と僕は、中学を同じにしている。

偶に見かける分には部活に熱心な風でもないようだったし。一応、顔見知りでもあるわけだし。

五人目候補として、声をかけてみようか。

＊

かけてみた。

八時半までに教室にたどり着いていれば出席扱いになる我が校だが、歩いて十分で登校が完了する僕は、七時過ぎには全ての出立準備を終えて、だから七時半ごろには、職員室にいるまだ少ない教師に嫌な顔をされながらも（八時になれば担任が鍵を開けに行く決まりがあつて、故にそれより早く登校してくる生徒は手間がかかって鬱陶しがられるのだ）クラスの鍵を受け取り、勿論誰もいない教室に入る。

電気もつけずに荷物を置いて、欠伸を一つ、それから教室はまた空になった。

廊下を歩く。一番下駄箱に近い僕のクラスから（三組の前、六組の後ろ側が正面に来る位置にそれぞれ階段があり、前者の方が近い）、一番遠い八組へと。

遅刻まで一時間あるこの時刻に、酔狂な彼女は登校してきている

のだ。

三年八組、くるおせ 刳生瀬 はなみ 葉波。

話したことは一度も無いけど、実の所一年の時は同じクラスだったから、席が隣り合わせになったこともあったりはして。

名前は覚えてる。そりゃあこれだけ個性的な名前、一度聞けば忘れまい。名簿を見た時は啞然としたものだ。

ともあれ、話したことは無い。席が隣合わせになろうと、それまで毎朝顔を合わせていようと、一度も。

だから真正銘、窓際二列目、前から数えて三番目の席に座る彼女に対して口にした言葉が、僕と彼女が初めて交わした会話の皮切りだった。

「おはよう、捻くれ者」

「奇遇だね、わたしも今丁度そんな挨拶を考えてたところですよ、井岡 三九郎」

おはよう、捻くれ者。
と。

刳生瀬は言った。

教室前方のドアを開けて、刳生瀬が首だけこちらに向けたタイミングでの挨拶だったにも関わらず、これまで一度も話したことの無い僕の名をフルネームで呼んだ上で、彼女はそう返してきた。

というか、ご挨拶だった。お互いまともな神経じゃない。

や、僕が仕掛け人だけど。

「ご挨拶も良いところです、今さらお前に話しかけられるなんて思わないし」

「そういうのをご挨拶とは言わない、予想外ってんだ。つーかいきなりお前呼ばわりかよ」

「ご不満で？ なら言いなおします。——今さらお前様に話しかけられるなんて思わないですし」

「君は僕の配偶者か!？」

「やめてください、名誉棄損とセクシユアル・ハラスメントで訴え

ます」

「ほんとにご挨拶だな！」

「おはよう、捻くれ者」

「僕の眼は正しかった、君は確かに捻くれ者だ！」

僕ほどではない、との意見は未だ覆しがたいが。僕は僕の捻くれ具合に所謂中二病的な信頼を置いている。あほらし。

いやさ、ほいさ、しかしこの女、中々面白いじゃないか。僕はこの二年間を幾分か無駄にしてきたらしい。上野や桂ちゃんの手いっぱいだったってのもあるけど。あいつらも一筋縄じゃないからなあ。

「捻くれ者、ね。やっぱりご挨拶ですが、何を根拠にお前はわたしをそんな風に言うんですか？」

「毎朝走ってるだろ。……わざわざ季節外れの方の道を。それを言うなら、なんで君は僕を捻くれ者だと判断するんだよ」

「いえ、今まではちよつと疑ってた程度でしたけど、今確信しました。わざわざ、とか言うのは、それに気付きながら反対を走るの捻くれっぷりがわかりやすくてカッコ悪いとか思ったからですよ。立派に捻くれてます」

「ほほう、言ってくれるじゃないか」

看破されていた。油断ならねえ。

「あ、それと井岡 三九郎、最初の一年はわたしが捻くれているからだったと認めますが、それからの数年は、お前の法則に気づいて、鉢合わせを避けた結果です。ぶっちゃけどうでもよかったんだけど、捻くれ者と直接擦れ違うのは嫌なので」

「君絶対僕の事嫌いだろ」

「大嫌いですね」

同級生の女の子に嫌われてしまった。いや、正しくいわば、嫌われてしまっていた、か。現在完了、なおかつ進行形である。ご挨拶だなあ。

「それで大嫌いな井岡 三九郎、ランニングを始めてからで言うと

通算五年余りの付き合いだけど、今さらお前がわたしに声をかけた理由を聞かせて欲しいです」

「ああ、そうだった。っていつても、ここまで話した時点で君が首を縦に振る可能性は無きに等しいんだが……」

大嫌いつて名言されたし。ん、まあ、理由の説明を求められてるのだから、一応説明せざるを得まい。

「じゃあ一つ。知らざあ言って聞かせやしよう」

「うざい前置きは省いてください」

うざいつて言われた。我ながらそう思うけどさ。

「首を振る……と言うと、何か依頼でもあったと言うことですか」

「簡単に言うとななるね」

「難しく言う？」

「頼みたい事があったりしなかったりしなかったりしなかったりしなかったりする」

「ややこしいだけです」

「君に頼みがあるのかもしれない」

「まどろっこしいだけです」

「午前七時半に登校してきている唯一無二の男子生徒が同じく早々登校している女子生徒に依頼があつて話しかけに来た」

「回りくどいだけです」

無駄な応酬だった。いや、簡単に言うって表現は大概「要点をまとめると」みたいな意味合いで使われることが多いから、難しく言えと言われても判断に困るのだ。状況説明を言葉を増やして試みたわけだが。

「じゃあ君ならどう言うんだよ」

「懇請しに来ました」

「なるほど」

綺麗な答えだった。何も言い方を難しくする必要は無かったのだ。ううむ、僕の思考回路もまだまだらしい。

「って、そういう話じゃないんだよ。だから、依頼をしに……懇請

しに來たわけだけど」

一息おく。どうやら今度は茶々を入れずに聞いてくれるらしい。捻くれ者らしい引き際だった。この辺りは見事。僕ほどではないが、と付け加えるのも忘れない。

「部活を作ろうと思うんだ」

「へえ。何部ですか？　と言っても、この学校って強制入部規則があるんで今さら無い部活があるのか疑問だけど」

その通りである。野球部やサッカー部等の運動部、手芸部や文藝部なんかの文化部も勿論、中学では珍しいラグビー部や茶道部、ここ数年需要が高騰してきているらしいアニ研など、この学校には相当数の部が存在する。マイナーな部がほとんどではあるが、五人いれば創設出来るのと、顧問の並立が許可されているのと、一度出来た部は廃部されない限り最低部員数が二人以上に下げられるのがあって、何年もかけてかなり広い範囲のジャンルが網羅されているのだ。名ばかりで溜まり場になっている連中もいると聞くが、なんにしろ、有るものがほとんどなのである。

「研究部だよ」

「研究部」

復唱して、刳生瀬は少しだけ臉を持ち上げた。訝しげな反応だ。

まあ、化学部も科学部も存在するから、類似部を選べばいいじゃないかと思っているのだろう。

「……二年前に、廃部になりましたね」

「知ってるのか」

意外な言葉だった。校内のあらゆる事情に精通している僕を持っとしても、数が有り過ぎて見る気になれなかったホームページの部活動紹介から情報を得た赤坂さんに聞いて、初めて知ったと言うのに。

「知ってます。だってアレの創設者は、わたしの従兄ですから」

「へえ」

「小学生の頃に一度会ったことがあります、尋常な人間じゃなかったです。それまでわたしは、捻くれてるなりに自分は少し世俗離れているような気分でしたんだけど、……身の程をわきまえようと思うくらいには」

「なんだそりゃ」

余談ですよと言って、刳生瀬は話を打ち切った。彼女中途半端な捻り具合の要因になったらしい上、僕が赤坂さんとの出会い以外に研究部に興味を持った理由たる脅威的な発明品の作成者で有る可能性も持った人物だ、こちらとしてはもう少し話を聞いてみたいところだったが、どうにもその気は無いようなので諦める。どちらにせよ、その人が作った研究部と僕らが作ろうとしている研究部は別物なのだ。遺物を漁らせては貰うけども。

「それで、井岡 三九郎、お前は研究部を再建するつもりなんですか」

「そのつもりだよ」

「それで、創設メンバーが足りないから、わたしに声をかけたとか、そんな具合ですね」

「そのとおりだよ」

僕の肯定を受けて、刳生瀬はふむと考え込んだ。「決めた」と、顔を上げる。

目線が合った。毎朝と同様に。

まだ朝だけどさ。

「入ります、研究部。さしあたっては今所属してる部を辞めたいんで、面倒だから退部届を貰ってきてください」

「人使い荒いな君」

これでメンバーがそろったと考えれば安いものだが。……その辺の感情も読んできているのだろう。中々の曲者じゃないか。

「朝のランニングと言い、正反对なのに変に似ているね、僕らは」

「やめてください、名誉棄損とセクシュアル・ハラスメントで訴えます」

「この場合セクハラはおかしいだろ！」

名誉を棄損されたのはむしろ僕の方だった。

どこまでもご挨拶な奴だ。つくづく捻くれていやがる。ともあれ。

顧問さえ立てば、これで晴れて、研究部設立である。

並立可能である以上、顧問の擁立なんてどうとでもなるし。

登校次第、朝一番で赤坂さんに良い知らせをしてあげられそうだ。

「あの、わたしはそろそろ朝の無駄思考に浸りたいので教室に帰ったらどうですか？」

「無駄思考とか言うくらいなら素直に邪魔だと言えよ！」

「邪魔なので教室に帰ってください」

「ご挨拶だな！」

「さようなら」

「間違っちゃいないけども！」

さよならも挨拶だ。

まあいいだろう。

「それじゃあまた放課後に来るけど……、そうだ君、今は何部に入ってるの？」

退部届を貰うにしても、これまた規則で、所属している部の顧問に貰わなければいけないのだ。理由を聞かれて引き止められることもあり、僕のようにまるで言葉も無くあっさり渡されることもあり。どうせ刳生瀬は後者だろうけど。

「失礼な男ですね。否定はしないけど」

「なら糾弾もするな」

失礼とか、言われ損である。こちらも否定はしないけど。

「それで、何部なの？」

重ねて聞く。

変に似ている僕ら。

捻くれ者の僕ら。

まあ、予定調和と言いますか。

「天文部です」
「あ、そ」

相似オポジット。(後書き)

似通っているのに逆側な、ひねた二人の出会い。相似オポジットでした。

刳生瀬とか、またアホな苗字を考えた物だと自分でも想いますが、本編主人公——Kさん（笑）の従妹ってことになるの大した違和感も感じられないような。

創設者がどうか、九割方の読者諸賢が把握しきっていることと存じますが、その辺は追々。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3302l/>

世界崩壊とは程遠い君と僕の恋慕事情。

2011年11月30日12時53分発行